

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 26 日現在

機関番号：23501

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007 ～ 2011

課題番号：19720139

研究課題名（和文）「第二言語における統語形態素とレキシコンの解釈・使用にみられる第一言語の影響」

研究課題名（英文）L1 influence on the interpretation and production of morphosyntax and lexicon in a second language

研究代表者

奥脇奈津美（OKUWAKI NATSUMI）

都留文科大学・文学部・准教授

研究者番号：60363884

研究成果の概要（和文）：本研究は、第二言語習得の際に第一言語がいかに関与するかを探るため、統語形態素とレキシコンという言語の異なる2つの項目に注目し、日本人や中国人の学習者の英語習得を調査した。その結果、両項目において、第一言語の影響が明らかにみられるものの、その影響の仕方や大きさは異なることがわかり、第二言語習得において、「第一言語の影響」が、言語項目ごとにさまざまな形とインパクトで現れることが示された。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the acquisition of morphosyntax and lexicon in a second language by Japanese and Chinese speakers learning English, and discussed how the first language influences the L2 acquisition of these different linguistic properties. It showed that the first language impact is widely observed in both linguistic areas; however, it differs how and how much the influence has an impact on these properties, suggesting that it is not plausible to take “L1 influence” as a simple phenomenon in the study of second language acquisition.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	0	0	0
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	0	0	0
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：第二言語習得、統語形態素、第一言語の影響

## 1. 研究開始当初の背景

1960年代より、第二言語学習者が既にもっている言語の知識が第二言語発達にいかに関与するかという研究は盛んになされており、1970年代には実証研究も始まった。近年は、第

一言語の肯定的役割が再び注目され、第二言語習得研究の主要な研究分野として認識されているほか、普遍文法の役割を考える上でも興味深い示唆をあたえていた。Schwartz and Sprouse (1994, 1996)による、第二言語習得

における普遍文法の役割に関する仮説では、第二言語文法に第一言語の様相が見られることは、それが自然文法である限り不自然なことではないと解釈される。一方、Sorace (1993) やHawkins (2001) においては、第一言語の影響こそが第二言語学習の最終的な困難点として残ると主張されている。このように、第二言語習得に対する第一言語の影響については、否定的見解と肯定的見解の両論があるが、いずれにしても最終的に習得される第二言語文法に影響することは実証されてきた。しかし、実際に言語モジュールでそれがどこに現れ、どこに現れないのか、という問題に関しては、これまで十分な実証的な検証がなされていなかった。この問題は、人間がもつ言語の本質を探るためにもさらに追及されるべき課題であった。

## 2. 研究の目的

言語モジュールに関わる言語項目について、異なる母語をもつ学習者を調査することで、その第二言語習得における第一言語がいかに関与しているか、その実態を明らかにすることであった。その方法として、第一に、統語形態素について調査し、第二に、言語モジュールの中でもより認知能力と関わるレキシコンについても調査することであった。そして、これら言語の異なるモジュールに関する母語の関わりを検証することで、第二言語習得一般における第一言語の影響の本質を明らかにすることであった。

## 3. 研究の方法

(1) 異なる母語を持つ英語学習者の英語習得状況とその第一言語の影響を明らかにするため、英語学習者（日本語と中国語を第一言語とする学習者）約120名からデータを集めて、テンスとアスペクトに関する統語形態素の解釈を調べた。

- ① テンスに関しては、that節補文と関係節内のテンス解釈を、容認度テストを通して調査した。
- ② アスペクトに関しては、「形式—意味」の関係がL1-L2間で異なる場合、特に「～テイル」とは訳せない*be + -ing* 形の意味解釈に調べた。単純形と*be + -ing* 形の一方がより好まれるべき文脈を与え、続いてそれぞれの形式を含む文を2文提示して、それぞれの容認性を判断するテストを行った。
- ③ パイロットスタディとして、日本人学習者と英語母語話者が言語テストに参加し、テストの妥当性を検討し、テストの改良を重ねた
- ④ 日本人学習者(大学生)の初級・中級レベル、上級レベル話者(英語圏に長期滞在経験をもつ学習者)を被験者として文許容度判断テストによる言語実験を行い、英語母語話者の結果と比較した。習熟度による違いがあるかどうかも見た。同様のテストを中国人学習者についても行った。
- ⑤ 先行研究の産出データと比較することで、L2の解釈と算出に相違があるかどうか、検証した。

(2) 第二言語レキシコンにおける母語の関わりを見るため、第二言語学習者が類似語における意味の関連性をどのように捉えているかを調査した。日本人英語学習者を対象に、L1-L2ペア語を利用して、意味関連性判断課題と文章完成課題を行い、英語母語話者の結果と比較した。

## 4. 研究成果

(1) 第二言語習得における第一言語の影響について、特に統語形態素の習得に着目し、日本人英語学習者によるthat節補文内のテ

ンス解釈を調査した結果、第二言語学習者が、母語における知識をそのまま転移するのではなく、肯定証拠に基づいて第二言語特有の統語とその意味領域を正しく解釈することができるかが分かった。微妙な意味解釈に関する項目を、low-intermediate レベルのような発達過程の早い段階で、母語話者と同様に解釈を行うことが明らかになった。ただし、先行研究の産出データとの比較から言えることだが、正確性をもって形態的に表現できるようになるのは、まだそのあとの段階であることでも示された。これは、第二言語学習者は、まずテンスを正しく解釈できるようになり、その後正しく使用できるようになるということを示唆している。

言語習得においては、一般的に理解が産出に先行するといわれるが、実験の結果と先行研究の産出データとの比較は、それを裏付けるものとなった。第二言語学習者は、言語的証拠に基づいて統語知識を構築するが、正確性をもってそれを形態的に表現するためには、さらなる言語的発達が必要であることを示した。

(2) アスペクトの「形式—意味」の関係がL1-L2間で異なる場合、学習者にとってどのような困難が生じるか、特に「～テイル」とは訳せない *be + -ing* 形の意味解釈（「形式—意味」の関係がL1-L2間で異なる場合）について調べたため、母語話者、中級・初級レベル英語学習者に対して文法容認性テスト（容認度の高さを、5から1で判断するテスト）を行った。その結果を表1に示す。

表1 *be + -ing* 形と単純形の容認度とSD

文脈	NS		中級		初級	
	<i>be + -ing</i>	単純形	<i>be + -ing</i>	単純形	<i>be + -ing</i>	単純形
① 進行中	4.44 (.715)	1.75 (.530)	4.12 (.664)	2.80 (.766)	3.50 (.565)	2.98 (.643)
②「一時的状態」	<b>4.11</b> <b>(.719)</b>	3.97 (.733)	<b>2.37</b> <b>(.933)</b>	4.36 (.642)	<b>2.30</b> <b>(.872)</b>	4.05 (.141)
③「状態」	1.98 (.494)	4.48 (.436)	2.34 (.838)	4.46 (.528)	2.66 (.740)	3.82 (.666)

学習者は、文脈の中で *be + -ing* と単純形という形式の違いを区別しており、「形式—意味」の関係がL1-L2間で異なる場合でも、習熟度があがれば、母語話者の解釈に近づいていくことが示された。一方、「一時的状態」を意味する場合、学習者は、母語話者のように「一時的状態」と「状態」の意味の違いを認識せず、習熟度を問わず、状態動詞の *be + -ing* 形による「一時的状態」の解釈が難しかった。これは、大学生レベルのL2学習者にとっては、「形式—意味」の関係の習得はまだ完全ではないということを示している。

日本語、英語ともに文法化されている進行相ではあるが、L1-L2間の「意味—形式」の関係は単純ではなく、確実に、かつ早い段階で習得につなげるためには、インストラクションを通して正しい明示的知識を十分に与えていくことが重要である。これまでのアスペクト研究は、主に発話データに基づいており、アスペクト形態素を使用できてもその形態素の微妙な意味を習得していない可能性を検証できていなかったが、今後は本研究のような解釈データに基づく方法も重要であるということを示した。

(3) 第二言語学習者が類似語における意味の関連性をどのように捉えているかを調査す

るため、日本人英語学習者を対象に、L1 – L2 ペア語を利用して、意味関連性判断課題と文章完成課題を行った。その結果、L2語彙習得において完全な意味発達は困難であり、一定程度の発達は可能であっても、L2語の意味を再構築し十分に発達させるには限界があるということが示された(表2)。同時に、語彙サイズの変化に伴い、段階的に発達する可能性のある領域であることも示唆された(表3)。

表2 文章完成課題における正答数と正答率

L2 ペア語	問題数	正答数 / 全問題数	正答率
chance - opportunity	3問	78 / 180	43.33%
danger - risk	2問	106 / 120	88.33%
goal - aim	1問	28 / 60	46.67%
error - mistake	2問	42 / 120	35.50%
trip - journey	1問	28 / 60	46.67%
draw - paint	3問	101 / 180	56.11%
noisy - loud	1問	47 / 60	78.33%
allow - permit	4問	45 / 240	18.75%
attractive - charming	2問	42 / 120	35.00%
contain - include	2問	61 / 120	50.83%
gain - obtain	1問	14 / 60	23.33%
liberty - freedom	1問	20 / 60	33.33%
depend - rely	2問	39 / 120	32.50%
disease - illness	2問	64 / 120	53.33%
計	27問	712 / 1620	43.95%

表3 語彙サイズ別グループにおける正答率

L2 ペア語	上位グループ	下位グループ
chance - opportunity	47.78%	38.89%
danger - risk	83.33%	93.33%
goal - aim	56.67%	36.67%
error - mistake	33.33%	36.67%
trip - journey	46.67%	46.67%
draw - paint	61.11%	51.11%
noisy - loud	83.3%	73.3%
allow - permit	22.50%	15.00%
attractive - charming	36.67%	33.33%
contain - include	56.67%	45.00%
gain - obtain	30.00%	16.67%
liberty - freedom	36.67%	30.00%
depend - rely	46.67%	18.33%
disease - illness	56.67%	50.00%
平均	47.78%	40.12%

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4件)

1. N, Okuwaki. (2012). Formulaicity of language: Its Pervasiveness and the processing advantage in language use. 『都留文科大学研究紀要第75集』、pp. 1-11. 都留文科大学 (査読無)
2. 奥脇奈津美 (2012) 「L2語彙習得における意味発達」『中部地区英語教育学会「紀要41」』、pp. 9-16. 中部地区英語教育学会 (査読有)
3. 奥脇奈津美 (2011) 「『～テイル』と訳せない *be + -ing* 形の意味解釈」『中部地区英語教育学会「紀要40」』、pp. 65-72. 中部地区英語教育学会 (査読有)
4. 奥脇奈津美 (2009) 「第二言語学習者による補文のテンス解釈」『中部地区英語教育学会「紀要38」』、pp. 247-254. 中部地区英語教育学会 (査読有)

〔学会発表〕（計 3 件）

1. 奥脇奈津美 「L2語彙習得にみられるL1相当語の影響」 第41回中部地区英語教育学会福井大会（2011年6月25-26日 福井大学）
2. 奥脇奈津美 「第二言語における「形式と意味」の関係の習得：「～テイル形」には訳せない「*be -ing*形」の意味を正しく解釈できるか」第40回中部地区英語教育学会石川大会（2010年6月26-27日 金沢学院大学）
3. 奥脇奈津美 「日本人英語学習者における従属節のテンス解釈」 第38回中部地区英語教育学会長野大会（2008年6月28-29日 清泉女学院大学・清泉女学院短期大学）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥脇奈津美 (OKUWAKI NATSUMI)  
都留文科大学・文学部・准教授  
研究者番号：60363884